

被災地の歴史資料・文化財の保全、震災の経験の記録化と保存!!
 幅広いネットワークづくりを通じて、歴史・文化を復興に活かす!!
 被災地から全国へ、歴史学と社会をめぐる普遍的な課題へ!!

史料ネット NEWS LETTER

第16号 1999年5月10日(月)

発行 歴史資料ネットワーク(神戸大学文学部内)
 TEL078-803-5565、FAX078-803-5589

目次	
新しい年度を迎えて 史料ネット事務局長・藤田明良..... 1	外岡秀俊著『地震と社会』を読む 奥村弘... 5 市民講座から生まれた出版企画
1998年度活動実績報告..... 2	藤田明良..... 6
埋蔵文化財 - 今後の取り組み - 藤田明良... 3	文献情報 / 取り組み報告とお知らせ..... 7
道場町連合自治会文書の整理を終えて 鎌谷かおる..... 4	兵庫県公館(県政資料館部門)との懇談会 / 猪名荘遺跡を学ぶ会 / 尼崎戦後史聞き取り
史料ネット活動報告書の編集作業 佐賀朝..... 4	講演会企画(NPOシンフォニー主催)..... 8

新しい年度を迎えて 史料ネット事務局長・藤田明良

5月の連休、ニュースの画面は、大地震で出来た断層を一目見ようと、明石海峡大橋のたもとのメモリアル施設に詰めかけた人々を、映しています。多額の費用を投じた巨大な展示館に対して、疑問がないわけではありませんが、凄絶な自然の営みをまるごと後世に残そうという、地質学者たちの執念がここにはあります。人間の営みを対象とする歴史研究者として、この大震災によっておきた様々なことを未来に伝えるために、どうすればよいのか、何ができるのか、考えさせられます。

地震から5年目をむかえる今年度は、阪神大震災対策歴史学会連絡会(史料ネット)にとっても節目の年であり、活動形態や運営体制について見直しをすすめ、次年度以降のあり方について、結論を出さなければなりません。一方で当面の課題としては、救出保全史料の整理を進め保管体制の目途をつけること、災害に対する歴史学会の取り組みとして、今回の活動がどこまで出来て何が足りなかったのかを明確にしておくこと、

文化遺産や震災体験の保全に向けた行政や市民の活動に、専門家がサポートできるようにすること、などがあります。このうち については現在、活動報告集を編集中であり、また5月に大阪、9月に東京で、大阪歴史科学協議会や歴史学研究会の例会という形で、議論の場を設けていますので、多くの皆さんの参加・発言をお願いします。

最後に、活動を支える資金カンパについて、従来から関係学会の大会会場等で袋をまわす募金方式と郵便振り込み方式を併用していましたが、今年度は郵便振り込み方式を基本に受け付けていく予定ですので、よろしくをお願いします。またあわせて、年4回発行しているニュースレターも、ぜひ購読してください。

“史料ネット News Letter”の購読を!!

史料ネットでは“News Letter”を年間4号発行しています。史料ネットの取り組みに関心がある、あるいは支援したいという方、ぜひ郵送購読をお願いします。年間購読料(郵送料)500円で受け付けています。

電話、FAX、e-mailのいずれかの方法で史料ネットセンターまでお申し込みいただくか、あるいは下記支援募金口座に「ニュース郵送購読希望」と明記してお振り込みください。

なお、1999年度の4号分は、次号第17号から第20号までとなります。1998年度郵送購読されている方は、更新の申し込みをどうぞお忘れなく。

史料ネット活動支援募金 (郵便振替)

名義 阪神大震災対策歴史学会連絡会 口座番号 01090-7-23009

1998年度活動実績報告

皆様のご支援により、1998年度も次のような活動実績をあげることができました。報告して、お礼申し上げます。

史料保全活動実績

1997年度に引き続き、保全された被災史料の整理作業を実施しました。神戸大学仮保管史料のうち、神戸市東灘区・藤本家文書の整理作業を継続中のほか、同中央区・長浜家文書のデータベース作成作業も行ないました。また、1997年11月から続いていた明石藩大庄屋・田中源左衛門家文書約2万2千点の仮整理作業を、全史料協近畿部会有志の協力も得て終了することができました。

一方、被災史料以外の地域史料保全への協力要請もいくつか寄せられており、史料および所蔵機関や地元自治体の史料担当部局の状況などを勘案しながら、協力できる範囲で弾力的に対処しています。このうち、神戸市北区道場町連合自治会から要請のあった文書160点の整理については、神戸女子大学の今井修平氏の協力を得て、同大学大学院生が目録を作成しました。この詳細については、本号掲載の鎌谷かおる氏による報告をご参照ください。

このほか、尼崎戦後史聞き取り研究会など関連団体による史料整理・保全や、自治体など他団体と協力しての震災資料調査・収集などにも、引き続き幅広く取り組んでいます。

市民講座・研究会等の開催

市民講座 第8回「明石城と明石の歴史的環境」 参加者約80人

森地区ミニ講座 9月～11月 計4回 各回約20人参加

1995年9月の第1回以来続けてきた「震災復興 歴史と文化を考える市民講座」は、第8回の開催をもって一応終了しました。今後は、地域のなかに歴史や史料・文化財を守るネットワークの主体が育っていくような方向を目指して、より地域に密着した住民主体の講座的な取り組みへと重点を移していきます。森地区でのミニ講座や、従来から取り組んできているさまざまな地域プロジェクトが、その足がかりとなると考えています。

分野別の取り組み

- ・埋蔵文化財 埋蔵文化財関係者・担当者会議 1回(4月19日)
兵庫県教委文化財課・神戸市教委文化財課への申し入れと懇談(9月、11月)
臨時遺跡見学会 長田区若松遺跡(6月11日、7人)、兵庫津遺跡(7月29日、10人)
猪名荘遺跡を学ぶ会への協力
- ・震災資料保存・記録化
(財)阪神・淡路大震災記念協会、震災・まちのアーカイブなどへの連携・協力
神戸大学震災資料についての研究会の開催 1回

科学研究「被災史料保全活動からみた都市社会の歴史意識に関する研究」

史料ネットの活動総括作業と平行して進めています。

神戸大学震災資料についての研究会の開催 1回

月の輪古墳見学会(8月30・31日)

史料保存運動史研究会 4回

「被災地の都市社会形成・災害と歴史意識」研究会 1回

関連企画、他団体との連携・協力等

前記の「分野別の取り組み」の項で紹介した、猪名荘遺跡を学ぶ会、(財)阪神・淡路大震災記念協会、震災・まちのアーカイブへの協力や、阪神地域の自治体、史料保存機関などとの日常的な連携のほか、次のような関連企画、他団体への連携・協力を努めています。

宝塚の古文書を読む会

岡本家大庄屋日記研究会(1998年5月発足)

尼崎戦後史聞き取り研究会(公害資料整理・記録化等)

あおぞら財団・公害地域再生センター(大阪市西淀川区) 公害資料整理・記録化事業への協力
兵庫県公館(県政資料館部門)訪問と情報交換(12月)

全史料協大会(11月、沖縄)での全体会報告(奥村)

財政報告(単年度収支、前年度よりの繰越額を含まない金額です)

1998年度決算(1998年4月～1999年3月)	
歳入 672,091円	募金567,791円 ニュースター郵送料41,000円 市民講座資料代50,800円 記録集販売12,500円
歳出 1,079,436円	通信費117,927円 備品・消耗品 72,669円 史料整理経費119,612円 市民講座・研究会等経費 312,684円 事務局人件費 456,544円

歳入・歳出の差し引き不足分407,345円には、1997年度からの繰越額913,109円を充当しています。

また、1997年度と同様、活動総括・報告書作成等の史料ネット関連の研究活動は、上記の史料ネットの会計とは別に、科学研究等の助成研究費により実施しました。この部分の経費支出は概算で約290万円、これと合計した史料ネットの実質的な年間財政規模は、約400万円となっています。1999年度の事業にも、ほぼ同額を要するものと予定しています。

埋蔵文化財 - 今後の取り組み - 藤田明良

被災地では復興にともなう埋蔵文化財調査が、依然続けられており、担当者の努力により貴重な成果があがっているが、遺跡の現状保存ができない、『調査報告書』の作成が難しい等、多くの問題も抱えている(一昨年度までの成果については、『日本歴史』609号に掲載された、大村敬通・兵庫県埋蔵文化財調査事務所副所長のレポート参照)。

史料ネットでは昨年度、調査を担当している兵庫県・神戸市等の教育委員会との意見交流や情報収集、猪名荘遺跡を学ぶ会など、歴史を学び街づくりに活かそうとしている住民主催の企画へのサポートを行ってきたが、今後の取り組みについて事務局が、4月21日(水)大阪

・上本町の旧なにわ会館で、長山雅一・大阪歴史学会特別委員(震災対策)をはじめとした埋蔵文化財の専門家と話し合った。

その結果、足元の遺跡に関心を寄せる住民へのサポートを、今後も続けていく、今回の震災に対する取り組みの到達点と限界を、考古学会や文化財保存団体、行政の動向を含めてトータルに検証する作業を、長山氏が中心となって取り組む、という方向性が確認された。

史料ネットとしては、引き続き、埋蔵文化財関係者や関係学会などと連携・協議しながら、被災地ほかの埋蔵文化財保存問題に取り組んでいく予定である。

道場町連合自治会文書の整理を を終えて

鎌谷かおる

道場町連合自治会文書は、1998年2月18日から25日にかけて神戸女子大学の大学院生数人で、整理ならびに仮目録の作成を行いました。そして今回、7月12日から1999年2月19日まで、史料ネットより文書を再び借り受けて、前回作成した仮目録を参考に本目録の作成と文書の撮影を行ったので、その作業と文書の内容について簡単に述べようと思います。

道場町連合自治会文書は、段ボール箱で一箱分、点数は160点。比較的保存状態は良く、総点数のほとんどが長帳でした。3日間ほどかけて文書の袋づめ作業と、前回の仮目録と文書を照らし合わせて内容を確認し、本目録を作成しました。

文書の年代は、天保9年(1838)から明治15年(1882)まで、総点数の9割が近世の塩田村

の文書で、内容は、主に三名の庄屋(治兵衛・佐兵衛・源左衛門)の作成した覚帳が中心です。この文書を見る限り、治兵衛が弘化2年(1845)から嘉永5年(1852)、佐兵衛が嘉永6年(1853)から安政5年(1858)、源左衛門が安政6年(1859)から明治2年(1869)に、庄屋役を務めていたことがわかります。

中でも、佐兵衛と源左衛門が庄屋であった時期の文書が多く、「御物成名寄帳」「免割算用帳」「国役銀割方帳」「御用諸色懸り物覚帳」「勘定目録」が、ある程度の年数分がまとまって残っていました。これらの文書は、近世後期の塩田村の実態を明らかにする上で非常に重要な史料であると言えます。

今後、塩田村についての研究がなされる時、今回作成した目録が役にたてば嬉しく思います。

史料ネット活動報告書の編集作業

佐賀 朝

活動報告書の編集と総括作業は、今年度の史料ネットの課題としてはもっとも重要な柱の一つです。多数の皆さんにお願いした原稿もほぼ出揃い、当時の記録・資料類も収録する形での報告書の編集作業が、本格的に進められています。

また、総論的部分の記述についても、編集担当グループを中心にその内容を固めつつあり、これをめぐっては各学会など公開の場を通じて皆さんの意見・アドバイスもいただきながらまとめ上げていく予定です。

このレターが発行される5月には、16日(日)に大阪歴科協の5月例会の場を借りて、活動報告書の内容と関連する企画を持ちます。今回は、これまで繰り返し論じてきた地域における史料保存の問題や住民の歴史意識と歴史学の課題といった点に加え、震災全体の問題が歴史学にどのような課題を提起しているのか、という点を

強く意識した企画にしました。その視野から見て、被災史料保存活動を通じて震災と歴史研究者が向き合ったという経験にはどのような意味があったのか、などについて、現代歴史学の課題との関わりで考えてみたいというのがその趣旨です。

また、9月には歴史学研究会総合部会(東京歴科研も共催の予定)の場を借り、今回の大阪歴科協の企画をより発展させた形で、史料ネットの活動も柱にしなごら、震災と現代歴史学の課題をめぐって議論する研究集会を開催する予定です。史料ネットの活動や被災地の「復興」の行方を見守ってきて下さっている、関東をはじめとする様々な地域の歴史研究や史料保存に関わる多くの方々に、われわれの経験や問題認識を提示し、活発な議論をしたいと考えています。できるだけ多くの方の参加を期待しています。

外岡秀俊著 『地震と社会』を読む
奥村 弘

去る4月28日、前項で紹介している大阪歴科協5月例会や9月の歴史学研究会総合部会の準備の意味も込めて、史料ネットのメンバーを中心とした書評会で外岡秀俊氏の著書『地震と社会』を取り上げました。それは、史料ネットが現在抱える課題を考える上で、同書の問い掛けている内容が重要な意味を持つと考えたからです。

外岡氏の著書は、上下二冊にわたる大著ですが、複雑な阪神淡路大震災の全体像を、一人の著者が明確な方法論をもって総合的に捕らえたおそらく唯一のものであり、今後の総合的な研究の起点となる著書です。震災からわずか4年で、本書のような総合的叙述がよく出来たなどというのが最初の感想です。

本書を一読していただければわかるのですが、外岡氏の大震災分析の方法は、序章で過去との比較、歴史的経過との関連で考えると述べているとおり、きわめて歴史的なものです。

過去の大地震の際に獲得された「災害像」が、今回の震災時までにはどのように変容し、いかに受け止められ、それがどのように影響したのか。「関東大震災級の地震に耐えられる」という建築物の神話はいかに形成されたのか。被災した阪神間の地域社会の歴史的変容はいかなるものなのか。災害救助をめぐる法的枠組みとその思想が、1874年の恤救規則以来いかに変わってきたのか。明治以降の都市計画から震災復興のあり方を考えるとどうなっているのか。このような主題が、最近の歴史研究の成果を取り入れながら叙述されています。

そして終章では、「現実に立ち向かって災害そのものを防ぐという技術・技法・科学の領域と、災厄を銘記・喚起して伝承の保水力を高めるといった記録の領域を喚起する『記録精神』」（P734）とを結合した「災害文化」を形成することの重要性を指摘します。

個々の歴史的対象の評価や、「記録精神」の捉え方やその中での歴史資料の位置などについては、検討すべき点があると考えます。しかし、

専門の歴史研究者でない著者が、「地震と社会」をとらえる上で、歴史的な分析方法と記録精神の重要性を主張した点は、傾聴に値します。史料ネットは、震災そのものの記録や史料をなんのために、どのようにして収集保存するかという課題に現在取り組んでいます。この活動に対して一つの示唆をあたえるものであると考えます。書評会当日、職場で震災資料保存に取り組んでいる方が、本書を読んで励まされたと言われたことが印象的でした。

また本書は、大震災での「ボランティア」活動の意味を考察し、ボランティアを自発的に当然行うべき職責をこえて、社会的な活動をすすめるものと述べています。「自発的に『分際』を越えてしまう」（P438）ことで、新たな関係が作られるとともに、いろいろな問題が生まれる。これは史料ネットが何度も経験してきたことです。文化財保存運動や震災後の様々な市民の活動のなかに、史料ネットの活動をいかに位置づけるかという史料ネットの総括の取り組みに対しても示唆をあたえるものです。

震災後、現場が次々と提起する問題を対処療法としてではなく、歴史に投げ返し、文化の問題として対応していかなければならないという著者の強い思いに、歴史研究者がどこまで応えることができるのか、歴史学の現在が問われていると感じさせられました。

外岡秀俊著
『地震と社会 - 「阪神大震災」記 - 』
みすず書房発行、
上巻1997年、366頁
下巻1998年、427頁、B6版

著者・外岡氏は、朝日新聞東京
本社社会部記者。

本書は、外岡氏が1996年1月から
1998年5月にかけて、「みすず誌」
に断続的に連載した論考を集成した
ものである。

市民講座から生まれた出版企画

藤田明良

1995年9月以来、被災地を巡回してきた「震災復興 歴史と文化を考える市民講座」から、本が生まれることになった。

今回の企画は、1997年9月に神戸市東灘区の御影公会堂で、作家の永井路子氏を招いて開催した第7回市民講座「清盛と福原京の時代 被災地神戸の歴史をふりかえる」での講演や関連報告・スライドを中心にまとめたもの。神戸の

歴史像や、住民の歴史認識についての新しい視角や成果を取り入れた内容で、史料ネットによるさまざまな取り組みの成果を組み入れたものとなっている。

本書は6月刊行予定で、内容目次は以下の通り。なお出版を記念した講演会やウォーキングなどの企画も予定している。

史料ネット関連出版企画

(仮題) 『歴史のなかの神戸と平家』

神戸新聞総合出版センター発行(6月発行予定)

予定価格1,800円

内容目次

- 永井路子「平家物語の時代と神戸」
足利健亮「清盛時代の大輪田泊と福原と和田京」
須藤 宏「地中から語る清盛の時代」
高橋昌明「福原の夢 - 清盛と対外貿易」
保立道久「神戸と『方丈記』の時代」
坂江 涉「古代国家と神戸の港」
藤田明良「清盛塚と鎌倉時代の兵庫津」
森田竜雄「関屋町と中世の港湾管理」
大国正美「名所記にみる平家伝承の定着」
奥村 弘「神戸開港と都市イメージ」

他

文献情報

- 神戸市立中央図書館『神戸市立中央図書館震災関連資料リスト 1.17文庫 平成11年1月17日』
1999年1月
- 木村修二「震災後に興った地域的古文書学習会について」
尼崎市立地域研究史料館紀要『地域史研究』28-1(82)号(1998年12月)
- 大村敬道「阪神・淡路大震災復興事業に伴う発掘調査の成果」『日本歴史』609号(1999年2月)
- 奥村弘「被災史料が語る地域の近代 - 元尼崎藩大庄屋・岡本家文書から - 」
尼崎市立地域研究史料館紀要『地域史研究』28-2(83)号(1999年2月)
- 菅祥明「震災体験聞き取り調査について - 尼崎での取り組みを中心に - 」(同前)
- 樋口恵子「猪名荘遺跡を学ぶ」
尼崎市立地域研究史料館紀要『地域史研究』28-3(84)号(1999年3月)
- 寺田匡宏「近世民衆の見た災害と復興 - 「慶応元年武庫川切れ洪水記録」をめぐって - 」
(同前)
- 片岡法子「大気汚染公害・住民運動資料の保存に関する研究会の記録」
『地方史研究』49-2(278)号(1999年4月)

取り組み報告とお知らせ

兵庫県公館(県政資料館部門)との懇談会(研究会)

昨年(1998年)11月に沖縄で開催された全史料協大会の場で、奥村弘・史料ネット代表幹事が全体会報告を行なったことがきっかけとなって、同大会に参加していた兵庫県公館(県政資料館部門)職員からの招きにより、12月18日(金)に史料ネットメンバーが同公館を訪れ、施設見学と情報交換の場を持った。このことは、すでに本ニュース前号の馬場義弘レポートで紹介した。その際に、今後も引き続き情報交換の場を持ち、史料ネットとして兵庫県公館の事業に連携・協力していくことが、話題にのぼっていた。

そこで、前回に引き続いて去る4月6日(火)、奥村以下5名の史料ネットメンバーが、阪神・淡路大震災記念協会囑託の佐々木和子氏をともなって兵庫県公館を訪問、県政資料館部門職員との懇談会(研究会)の場を持った。この日のテーマは、主として、阪神・淡路大震災に関する資料の保存、そのなかでも公文書の保存について、県史終了後の県公館の事業(兵庫県の公文書館事業)についての二点であった。県政資料館部門の職員の方も、事前に資料などを準備していただき、事業の現状について率直な説明をいただいた。上記のいずれについても、兵庫県という大きな組織のなかで庁内的な理解とコンセンサスを得て仕事を進めていくうえでは、大きなご苦労があるようであった。

今回の意見交換を受けて、史料ネットとしては県の公文書館事業にこういった協力ができるのか、具体的に検討していく予定である。同時に、今回の懇談会(研究会)の開催が、兵庫県域の阪神・淡路大震災に関する資料・記録保存の取り組みにおいて、行政サイドにおける車の両輪ともいべき兵庫県公館と阪神・淡路大震災記念協会の連携にとって、いくらかでもプラスとなればよいのではないかと考えている。

猪名荘遺跡を学ぶ会

第6回例会 1999年5月15日(土)午後2時 小田公民館(JR尼崎駅北東5分)集合

今回は、猪名荘遺跡のある潮江地区周辺を街道沿いに歩いて、地域の歴史を学びます。

尼崎戦後史聞き取り研究会

1999年5月27日(木)午後6時30分から 於尼崎市立地域研究史料館(阪神尼崎駅北東10分)

書評会 上野千鶴子氏著『ナショナリズムとジェンダー』(青土社、1998年)

問い合わせは、尼崎市立地域研究史料館内、同研究会(TEL06-6482-5246)まで

都市の文化をつくるもの

歴史文化を生かした市民主体のまちづくりに向けて、具体的に取り組む講師陣を招いての企画です。一方通行の講演会ではなく、取り組みやネットワークが生まれる場に育っていくことを期待して、パーティもセットしました。

第1回目は、「都市の文化をつくるもの」と題して、おふたりの講師をお招きしました。ぜひふるってご参加ください。参加申し込みが必要です。

講師 河内厚郎氏 (評論家、プロデューサー)

尼崎や阪神地域の文化的背景、それをまちづくりに活かしていく市民や行政による取り組みについて、幅広い視点からお話しいただく予定です。

川島智生氏 (建築史家、博士、阪神間・都市と建築の会主宰)

阪神間に残る近代住居建築について具体的にご紹介いただき、さらにはこういった歴史遺産の街づくりへの活かし方について、お話しいただきます。

日時 1999年5月29日(土)

午後3時～5時 講演会 午後5時～7時 ワインパーティ

場所 尼崎市中小企業センター

尼崎市昭和通2-6-68 阪神尼崎駅北東10分 TEL 06-6488-9501

参加費 講演会のみ=1,000円、講演会+パーティ=2,500円

主催・参加申し込み NPOシンフォニー

次のいずれかによりお申し込みください。

TEL(06-6483-2328)、FAX(06-6483-2329)、e-mail(y129@gold.ocn.ne.jp)

協力 歴史資料ネットワーク(略称史料ネット)

このニュースは、NIFTY-Serveの歴史フォーラム・歴史館2番会議室「地域史情報室」に、“曾根崎新地のひろ”さんに転載していただいています。史料保存関係のホームページ「Archivist in Japan」を開設している小林年春さんのご協力により、史料ネットの情報を同ホームページに掲載していただいています。

<http://www.archivists.com/> または

<http://www.asahi-net.or.jp/~hm7t-kbys/archivists/> または

<http://member.nifty.ne.jp/archivists/>

史料ネット NEWS LETTER No.16 1999.5.10(月)

編集・発行 歴史資料ネットワーク 〒657-8501 神戸市灘区六甲台町1-1

神戸大学文学部内 TEL.078-803-5565

FAX.078-803-5589 e-mail yfujita@lit.kobe-u.ac.jp